

日本語教師の役割

—「学習者側に立つ」ということの意味を考える—

井上 敬子

【キーワード】日本語教育 日本語教師 学習者の環境 学習者側 役割

I はじめに

毎年、新しい留学生を迎えると、目標に向かってどれだけ楽しく、価値のある授業が展開できるのか、心が引き締まる。前年度の反省を踏まえながら目標を立てたものの、本年度の留学生に全面的に踏襲できるわけもなく、自ずと緊張感が増してくる。そしてまた、決まって、同じ悩み・疑問もおきてくる。すなわち、

①「学習者側に立った」教師とはどのような教師なのか

②「学習者側に立った」教育とはどのような教育なのか

という2点である。以前から、「学習者側に立つ」ということばを耳にするし、自身でもたびたび使用している。しかし、その意味についての考察は十分であったろうか。承知の通り、「学習者側」という意味は、「学習者の立場」という意味で、当然、「学習者側に立つ」という意味は「学習者の立場に立って」という意味になる。

本稿は、筆者が日本語教育に従事した経験および、自身の授業を内省しながら、「学習者側に立つ」ということばの意味をあらためて考察し、そのことについて気付いたいくつかの点を整理したものである。

なお、本稿で記述する「留学生」とは、大東文化大学別科生に限定したものではなく、筆者がこれまでに関わった外国人留学生のすべてを指すものである。また、本稿での「日本語教師」とは、学校教育機関、および、それに準じる機関(市・区・町・村の国際交流協会が運営する日本語ボランティアグループなど)で、定期的に、日本語を教えている教師を指している。さらに、本稿の課題として、筆者の教育実践活動に言及することが望まれているので後日、読者に教えを乞うつもりでいくつか紹介している。

II 「学習者側に立った」日本語教師

これまでも、日本語教師に対する理想像や条件については、さまざまな方面で議論されている。具体的な教師像を上げて論じている文献もあるが、ここでは、「学習者側に立った」日本語教師の基本的な役割について考察することにする。

II-1 学習者側に立つとは

現在、日本語教師になるための資格試験制度や、教員免許制度は定められていない。

しかし、ニーズという点から学習者側に立って将来を見据えた場合、日本語教師に求められる条件、理想的な教師像はかなり明らかになってくると思われる。たとえば、西尾珪子氏(2004)は、さまざまな学習者のニーズに対応できる日本語教師の条件の一例として、

大学の留学生に対する日本語教師の場合は、大学の教官が当たる。当然、教官採用の場合は、研究業績を問われるが、将来日本語教師になる学生を指導することもある。となれば、研究業績に加え、日本語教育実践能力が重視される。つまり、教育理論に基づく具体的実践が出来る教師が求められる(要旨)

との試案を呈している。さらに、同稿において、就学生に対する日本語教師、技術研修生に対する日本語教師、ビジネス関係者に対する日本語教師、定住者に対する日本語教師、日系人に対する日本語教師、国際結婚の配偶者に対する日本語教師等々多岐にわたっての現状と問題点、そして、それをふまえた理想的な教師像を具体的に述べている。

だが、同じ目的をもつ学習者で編成したクラスであったとしても、現実には、たとえば、国費留学生なのか私費留学生なのか、漢字圏出身なのか非漢字圏出身なのか、クラスの人数は多いのか少ないのか、レベルは揃っているのかいないのか、等々、無限に細分化していく。

学習者側に立って、という観点から授業を考えていくと、それに応える教師が無数に存在しなくてはならないことになってしまう

との声も耳にするが、やはり、できる限り、学問に専念できる環境作りの支援をしたいものである。

II-2 学習者側に立った学習目標とは

留学生の場合は、通常、日本語を学ぶ目的がほぼ絞られている。それでも、まず、学習者には目的をよく聞くことが大事である。学習者自身にとっても、主体的に学習活動に向かう動機となって有意義である。教師が、学習者の目的を明確に知り、現状(日本語の習得段階や意欲など)を考慮した上で、期間内に到達可能な目標を設定することは重要な点である。実際問題として、学習者の多様化したニーズにすべて応えることは困難だ。

しかし、「～が分かった」、「～ができるようになった」という達成感は、学習者だけでなく教師にとってもまことに喜ばしいものである。複数の学習者に共通して教えるべきクラスの学習目標と、個々のニーズに添った個別の学習目標とを併せもった指導が実現できれば、この上ないことである。

とはいえ、日本語教師の場合、全員が、学習者のためのシラバス・デザインをするわけではない。入門・初級レベルの学習者には、数名の教師が1チームになって、一冊の

テキストをリレー式に教えることがよくある。その場合は、最終的に、コーディネーター（もしくは、そのチームの中心者）がコースデザインをしたり、シラバスを作成したり、テキストを決定したりするのが通常となっている。チームの教師たちは、そのスケジュールとシラバスに準じて授業を進めていくことになる。したがって、一人ひとりの教師が、授業を進めていく中で、教材やシラバスが学習者にとって最適か否かをチェックするということが、「学習者側に立つ」ことになる。筆者が単独で留学生を担当する場合に心掛けていることは、次の点である。

- ① 学習者が日本語習得をしたい理由・事情を知る
 - ・聞き取り調査（または、記述式）
- ② 学習者が考えている到達地点（目標）を知る
 - ・このコース終了地点でどのようなスキルを身につけたいか
- ③ 学習者は②の実現のためにどのような努力をしようと考えているのかを知る
＜過去の回答例＞
 - ・一日15分、ラジオでニュースを聞く
 - ・日記を書く
 - ・新聞記事を切り抜いて声に出して読む
 - ・その日習ったテキストの単語を暗記する
- ④ 学習者の目標に対して、どのような教師（井上）の支援を期待しているのかを知る
＜過去の回答例＞
 - ・たくさん宿題を出してほしい
 - ・書いたものを添削してほしい
 - ・練習問題を出してほしい
 - ・発音を矯正してほしい
 - ・プレゼンテーションの方法を教えてください
- ⑤ ①～④の内容を踏まえて、どのように支援すればよいのか検討する
 - 1 学習者の現段階の学力を知る（実力テスト）
 - 2 1を踏まえ、シラバスを見直す
- ⑥ 学習者が考えている学習内容と、教師が考えた内容とを比較し、（条件を付加された場合も含め）学習者にとって、実現可能なものか否かを再度検討する
- ⑦ 学習者と最終目標を確認しあい、授業に入る

以上が、本格的な授業開始までに短期間で実施することである。ちなみに、日本人学生には、初回授業時にこれと同様のアンケート調査を行い、シラバスの微調整を行っている。この調査は、漠然と受講しようとしている学生のための動機付けになる。さらに、具体的な目標と授業内容が見えてくるので、たとえ1コマ費やしたとしても、後の授業が円滑且つ効果的に展開できるので必ず実践している。

さて、次に、コースの途中では、おもに次の2点をチェックする。

- ① 定着が進んでいるのかどうか、確認する
 - ・クイズ・テストなどを実施する

② 学習環境がマイナスに向かっていないかどうかを確認する

- * 学習意欲・生活・経済状態・健康・アルバイト・人間関係
孤独などの問題を抱えて悩んでいないかなどをみる
- * 呼び出して聞くのではなく、学習者に変化がないか注意する

先にも触れたが、このチェックは、チームを組んで授業を進める場合にも重要な点である。一人ひとりの教師が気づいた点を、コーディネーターもしくは中心者が、まとめ、必要ならば、他の教師にも聞き取りを行ったり、会議を開いたりして解決策を検討し、学習者に還元していくことが「学習者側に立つ」ことにつながっていく。コーディネーターもしくは中心者は、現場の教師の声を無視することがあってはならないし、初めのシラバスばかりに固執することがあってはならない。シラバスの変更は最後の手段だとしても、学生個人のプライバシーに関わることは除いて、学習面での情報の共有と、微調整は必要なことだと考える。

II-3 学習者側に立った教材とは

教材は学習者のために用意されるものである。すぐれた内容だからといって必ずしも良い教材とは限らない。学習者の目的や実状に応じた教材が、「学習者側に立った」すぐれた教材となる。教師は、目標や段階に応じて「何を」「どんな教材で」教えるのか明確にしながら最適の教材を準備することが肝要だ。最近では、外国人のための、地域に根ざした教材作りも盛んで、生活の場が安全で快適にできるように工夫されたものも多い。

たとえば、本学の別科生の教材について、大河原(2004)は、「実際に教材の作成を行うには、別科生の普段の生活や学部に進学してからの日本語の問題点などを事前に調査しておく必要があるだろう」との条件を付しながら、下記のように提案している。

別科の目的や学生(の傾向)に合わせた教材があつてしかるべきである。別科独自の主教材(教科書)を、今後作成して行くことを検討していく必要があるのではないか。中心となる教材を作成するというのとはそんなに簡単な作業ではないが、以下のようなメリットも考えられる。

- ① 語彙、場面、話題などが学生の生活に関係したものとすることができる。
- ② 本学の別科に特化した内容にすることで、教室以外のさまざまなもの(例えば、学内の施設など)を補助的な教材として考えることもできる。
- ③ 一年間という短期間の教育において、必要な内容や能力に焦点をあてて教えることができる。
- ④ 日本語教員のそれぞれの能力や特徴をある程度考慮し、教員にとっても教えやすい教材とすることもできる。

本学で学ぶ留学生が、いち早く学生生活に慣れ、学習に専念できるようにすることは重要課題である。速やかに具体化されることを願っている。

さて、詳細は次項で述べるが、学習者にとっての教材はいわゆるテキストだけではない。学習者は、目前の教師の一挙一動から、日本語・社会・日本、その他あらゆるものを学びとろうとする。某語学学校の『『え〜っと』は、いらんよ』というコマーシャルはじつに衝撃的だった。リーディングの手本を示す場面で、語学教師とみなしたオウムが、「え〜っと」と口癖のような前置きを言う。すると、生徒とみなしたオウムたちが声をそろえて元気よく、「え〜っと」とオウム返しする。駄洒落や、教え方の悪い教師を揶揄した点にもおもしろさはあった。しかし、さらに考えさせられたのは、語学の学習者は教師の言動を疑いもなく身につけようとするという点である。確かに理屈としては、理解していたが、あらためて恐ろしい事実を突きつけられたように思った。学習者側に立った教材とは、きちんとした話し方をする教師でもあり、熱意をこめた魅力ある授業をする教師でもあり、誠実に対応する教師でもある。

III 学習者の学習環境のとらえ方

日本語教師が、学習者の日本語能力を育成するのは自明のことである。

ところが、語学能力といっても「教師が学習者に身につけて欲しい語学能力」・「生活に必要な語学能力」・「日本語教員となるための語学能力」・「会社の採用試験に必要な語学能力」等々、じつにさまざまである。しかし、学習者の日本語の学習目的によって、抽象的な語学能力ということばが、具体化する。つまり、目的達成のために学ばなければならない学習範囲や、身につけなければならない言語技術が明らかになってくるということである。同時に、学習者別に到達目標を立てることの教育的意義と必然性が出てくるのである。そして、その目標立ての基底部に、教師が学習者の学習環境を知ることの大きな意味がある。

III-1 留学生を取り巻く現状

アジア系の留学生たちのアルバイトは、どんなに優秀な学生でも、皿洗いやフロア係りの仕事などしかありません。先生は、そのことについてどう思いますか

数年前、中国のP大学の成績・人格ともに優秀な学生が、私にこのような質問をした。明らかに差別の問題である。同じアジア人でありながらこの様である。

また、一昨年は、他大学の中国人留学生が、アルバイト時間の超過で、強制送還になった。彼はひじょうにまじめで、朝一番にクラスに入って予習をしていた。授業料と生活費を捻出するために、朝方近くまで仕事をしていたそうだ。そして、アパートの荷物も整理できないまま国に帰されたということだった。どこかで「ルール」ということばを持ち出して、一律に裁かなければならなかったのか、今もって残念なことである。彼らは、日本語が分からないだけで、彼らの人格や知識量と比較できるものではない。しかし、アルバイト先や市中で、これに類する悲しい思いをさせられている留学生は大勢いるのだ。

彼らの相談内容や、簡単な聞き取り調査から、「たまたするな」・「バカ」・「こんなことも

分からねえのか」等などの暴言を、雇用者や同年代のアルバイトの若者から、頻繁に使用されていたことがわかった。まことに憂慮すべき現状である。気取らなくても、上質とまでいかななくても、もっと、誠意ある表現ができるはずである。学習者が筆者に、悪いことばの意味を尋ねた場合、おもに、次のような順で問答をしながら答えていく。
 <アルバイト先で覚えたよくないことば>

- 1 場面の文脈を思い出させる
 そのことばは、いつ・どこで・だれが・何をしているときに
 (どんな状況で) 使われましたか
- 2 意味を教える→意識するようにしている
 (例) のろま ① それはよくないことばです
 ② もっと早く仕事をしなさいという意味です
 ③ 意味が分っても使わない方がいいです

留学生たちは、アルバイト先でも日本語を習得しようとしている。つまり、留学生にとっては学習環境の一つになる。したがって、日本人の意識次第で、留学生の言語環境はまったく異なったものになる。彼らがまず、身近な人の使用した日本語を入り口として日本・日本人を理解し始めることを忘れてはならない。彼らは私たちとともに生きている人間である。

Ⅲ-2 学習環境としての教師

平成17年度の日本語教育能力検定試験には、7,231人が応募し、受験者数5,958人に対して、1,155人が合格した。その中でいったい何人の人が教壇に立つのだろうか。小出詞子氏(1974)は、日本語教師の資格と心がまえについて、以下のことを指摘している。

日本語教育に職業的誇りと熱意が持てる人、胸をはって「日本語を教える」と言える人、は先ず資格があると思いたい。反対に日本語を教えていることをかくしたり、「日本語も教えるが、『・・・学』の講義ももっている」などと弁解がましく言う人は、失格と考えられる。

また、「日本語後教育機関が考える教師の条件」(1988—135機関のアンケート回答の報告)には、重視すべき教師の条件として考えられている項目が30挙げられている。以下がその項目である。

- | | | |
|--------------------|-------------|----------|
| 1 共通語が明晰に話せる | 2 声大きい | |
| 3 非常にユニークなものを持っている | 4 向上心がある | |
| 5 性格が明るい | 6 謙虚である | 7 忍耐力がある |
| 8 何事にもきちょうめんで緻密である | 9 身だしなみがよい | |
| 10 対象となる学習者の母語が話せる | 11 英語が堪能である | |
| 12 外国滞在、留学の経験がある | | |

- 13 専門的な分野の刊行物の記事が解説できる（日経など）
- 14 一般の新聞の記事が解説できる
- 15 日本の組織で仕事をした経験がある
- 16 国際ビジネスに精通している
- 17 他の分野で教師をした経験がある
- 18 日本語教育の長い経験がある
- 19 日本固有の文化について解説できる（華道、茶道など）
- 20 日本の古典文芸について解説できる
- 21 次の科目を大学の学部レベルで修了している
(a 日本語学) (b 言語学) (c 教育心理学) (d 社会学) (e 文化人類学)
- 22 言語の分野で大学院レベル以上の研究実績がある
- 23 フルタイムで仕事ができる
- 24 午前9時以前、午後5時以後にも授業ができる
- 25 学生との課外活動にも積極的に参加する
- 26 日本語教師で生計を立てる必要がない
- 27 日本語教育能力検定試験に合格している
- 28 カリキュラムを作成することができる
- 29 教材を開発する意欲と能力がある
- 30 研修などを数多く受ける

日本語教育のさきがけ時代と比較し、言語学的な研究が進んだ。国際的な文化交流のための機会も多くなった。しかし、筆者は、学習者との間に基本的な信頼関係が築かれるための、辛抱強く愛情深い教師が次々と誕生すること願っている。

さて、ここで再度、学習者にとっての環境について整理しておきたい。

日本における学習者が置かれる環境は、次の①～④等である。

- ① 学校機関（大学・大学院・語学学校など）・ボランティアグループ
- ② 住まいの近隣（コミュニティ）
- ③ アルバイト先
- ④ 自分の部屋

学習者は、本では学べないことを環境から教わる。その環境の中から、自分の心に宿ったものをもとに、日本・日本人という姿を作り上げていく。

日本語教師の場合、学問的な知識のほかに、「日本で生きていく」力をつけさせなければならないのが、課題となってくる。学習者のおかれた環境で、いかに教材が、運用面・利益面ともに、活用されるか。また、知識・情報が有益に生かされるか。そして、一つの学びが、次の学びへの意欲につながっていくか。筆者の課題は山積みである。

さらに、話し手側のことばを理解し、それに反応することは、コミュニケーションの第一歩である。学習者が、日常の様々な場面に即して、適切にことばを選ぶことができるようになることは、いうまでもなく、言語教育上の重要課題の一つである。ところが、「暖かくなりましたね」のあとに、

<続くことばの例>

- ① 「そうですね」
- ② 「そうですか」
- ③ 「春ですね」
- ④ 「昨日は最悪でしたね」

上記の①～④のどれを答えるかによって、場面の雰囲気が変わってくる。もちろんこのような短い会話だけを基にして、これこれと決定付けるのは危険である。しかし、受け手側が、話し手の心情や、場面を理解しているか否かによって、反応することばが違えば、その返事を受けとめる側の心情にも大きな違いが出てくることは間違いない。日本スタイルと一括できない場面も多いが、情緒的な会話がなされる場面も少なくない。また、

- A 「こんにちは」
- B 「あ、お出かけ？」（「あ、学校？」「今日も学校？」「アルバイト？」）
- A 「ええ、ちょっとそこまで」
- B 「そう、行ってらっしゃい」

日本人にとってはなんでもない会話だと思えるが、留学生がここまでになるのにはかなり時間がかかる。深く立ち入っているのではなく、近隣のこうした単なる挨拶にすぎない場面でも「まじめに反応しなければならないのが億劫だ」と話す留学生もいる。このような日常のコミュニケーションは、一人暮らしの留学生には大切なことである。緊急時に助けてもらえることもあるかもしれない。教師は、予定された教材範囲を学びながらも、同時にさまざまな面から、日本社会で独り立ちできるような学びの工夫をした方がよいと思う。

筆者は、入門・初級レベルの学習者と教室で話すときには、次のような点に注意している。

- ① 明確で簡潔な表現をする
- ② 文単位で話すようにする
- ③ 間違えたら気づいた時点ですぐに訂正をする
- ④ 嘘や言い逃れをしない
- ⑤ 万が一、分らない時は学習者とともに調べる
(または、調べてから必ず回答をする)
- ⑥ 学習者が生活の場ですぐに使えるように例文を作る
- ⑦ 話題は、学習者の環境の中で生かせるものを選択する
- ⑧ できる限り、日本ならではの物で、五感で楽しむことができる教具を用意する

教師を通過していくからこそ「教育」ということばになる。

学習者は、教師というもっとも間近な環境から、人間社会のリアリティーを学んでいく。そして、さまざまなことが「教育」という無形のかたちで学ばれ、吸収されていく。学ぶ心は純粹であるからこそ、教師は学習者にとって良い環境になる必要がある。学生

の鋭敏な「心」は、教師に怠慢やエゴイズムがあれば、鋭く見破っていくだろう。もし、教師に社会性がなければ、後日修正されるにせよ、日本社会の中での社会性の部分が育ちにくいであろう。

教師と学生とで何を学び合っていくのか、努力と努力の現場にのみ、価値が生まれるのであろう。母になることが必要ならば、喜んで母になり、友達をほしがっていれば、楽しい友達になり、厳父の如く叱らなければならないときには、譲らずに叱る、そのような現場主義の、自在な教師になりたいと思いながら今日も挑戦している。

IV まとめ (日本語教師の役割)

IV-1 学生にとっての教師

本学別科では、おもに、学部入学希望者を対象に、日本語教育を行っている。入学の保証を前提に日本語教育するものではないが、現実には過程修了者のほとんどが学部入学を実現させている。そして、その学部入学後の留学生たちからは、もっと日本語の勉強を続けたい、という声を聞く。どうやら、学部の授業、とりわけ、講義式の授業において、聞きながらノートをとることができなかつたり、専門用語や文学的表現の意味がつかみ取れなかつたりするようだ。

また、日本人学生でも苦勞しているレポート作成にいたっては、試験時期にかなりの本数を作成しなくてはならないため、心ならずも間に合わせるができなかつたという話を聞いた。このような声に答えるためには、どうすればよいのだろうか。それとも、そのような留学生の声を聞いても、すべて、大学生だから自己責任とさせた方が教育的によいのだろうか。

筆者は、ひとたび受け入れをしたならば、留学生の目標実現のために手を尽くすのは当然だという考えを持っている。ついでながら、これは、なにも、留学生に限っての話ではないことに言及したい。どのような学生であっても、携わった教員は、その学生の幸福を願い、最大の学習支援をするべきだと考えている。筆者は、具体的に、次の三点を自分への戒めとしている。

- ① 教師は、学習者にとってロールモデルとなることを忘れないこと
- ② 教師は、学習者の最大の支援者であること
- ③ 教師は、現場に即して柔軟に対応できるようにすること

(留学生にせよ、日本人学生にせよ) 学習者にとっては、教壇に立っているのは、自分たちに何かを教えてくれる「教師」だと思っている。したがって、教授側が著名な学問の大家・研究者であったとしても、学習者にとって、教える、教えられるという場面が発生する限り、その人物についてのいかなる肩書きよりも、「教師」であるという認識が最優先になっているはずだ。学習者側に立って、考えるならば、日本語教師は、日本語教師である前に、原点的な「教師」という自覚と節度を持ち、絶えざる研究努力を

怠ってはならないことになる。その上で、科目の目的・特色を生かした授業を展開させることが肝要だと考える。当然、今述べていることが、釈迦に説法であることは十分に承知している。しかし、大学教育機関の場合、研究が最優先されがちである。そのため、学生との間にコミュニケーション不全が生じているという記事を読んだり、指導管理能力不足に起因する事件が起きたりすると、まことに残念な思いになる。大学は研究機関か教育機関かについての議論はともかくとして、現実の教場は、さまざまな教育的問題を抱えている。

とはいえ、昨今の学生が甘やかし状態にあることや、学生の学力低下・非常識を嘆いてばかりいるのでは何も始まらない。山登りの厳しさと登山後の爽快な喜びを、先立って会得した者が、後続者へ懸命に語り、希望を持たせ、そのための具体的な準備をさせていくことが成功に導くことになる。よく譬えられることではあるが、やはり、教師の学問に対する情熱と真剣さ、また、根気強く愛情のある導きによってしか、心ある学生は育たないのではないだろうか。多くの学生にとって大学教員は、学問の上での最後の教師になる。教えることが続く限り、魅力のある授業で勝負しなければならない。教えることの重み、人生の先輩としての重みから逃げずに、無事、社会に巣立たせることに力を注ぎたいものである。

IV-2 留学生受け入れ大学の今後

今後、各大学は時代の要請とともに、より多くの留学生を受け入れることになるであろう。外国の大学との交換教員を受け入れる機会も増えるかもしれない。そうなれば、それに伴って、学習者側に立った日本語教育プログラムのさらなる充実が求められ、優れた日本語教員もさらに必要となってくる。そうした大きな目標と同時に、本学の別科日本語教育のあり方も変容するであろう。

最後に、恐れず思いつくままに理想を語るならば、筆者は、今後、具体的に、以下のような学習支援体制が導入できないものかと考えている。

<学習支援体制として①>

- 1、別科での学習段階を入門・初級・初中級・中級・上級に組む
 - *ある年度に、各段階に該当する学生がいない場合は開講しない
- 2、中・上級段階は、学部留学生も受講できるようにする
 - *あるいは、どの学部においても中級・上級段階の日本語科目を設置し、正式に履修でき、単位として修得できるようにする
- 3、学部別に（分野別に）、専門（研究）に必要な基礎語彙を学ばせる教材を開発（準備）する
 - *日本人学生の基礎研究などにも使用可能な程度のもの
- 4、上級の目標は、3の教材を使用して、専門分野の講義が理解できるようになるまでとする
- 5、大学院入学希望者には、予備教育課程を設け、目標は、説明の述べた、レポート

の書き方が習得できるまでとする

- * パワーポイントや表などを活用しながら、専門分野の中からテーマを探し、プレゼンテーションできるようになることが望ましい

<学習支援体制として②>

1、チューターの育成とその活動を充実させる

- * チューターは、意欲的に日本語教師を目指している学生や、海外留学経験者、留学生のためのボランティア活動を積極的に欲している学生などを募る。
- * 募ってきた学生については、チューター活動の目的や、学習支援の際に注意すべき事柄を含めた研修会を開き、その活動が、日本語学習者にとってはもちろん、チューターにとっても意義ある活動となるようにさせる。

2、学内の教員のための日本語教育研修会を開催する

- * 留学生の現状と課題、および、留学生に対応する際の留意点などについて理解を深めるための研修会にする
- * 希望者には、定期的な日本語講座を開講する

<学習支援体制として③>

1、寮または、それと同様の施設を準備する（入寮は任意）

- * 少なくとも別科を含む予備教育期間は経済的負担を軽減させる
- * クラブの寮などは、年度によって違いはあるだろうが、空き部屋がある場合は、留学生も借りられるようにする
- * 公営住宅などにも留学生枠を設ける

以上、本来の役割を超えて、支援体制にまで言及してしまったが、これらについては、今後の課題として引き続き考えていきたい。

最後に、日本語教育という重要な現場をお与えくださった諸先生、忍耐強くお導きくださった諸先生、また、多くの留学生の皆さんに心より感謝をこめて擲筆したい。

【参考文献】

- 1 国際日本語普及協会 (1988) 『一この多様化の時代に一望まれる日本語教師とは』第11号 国際日本語普及協会
- 2 西尾珪子 (2004) 『日本語教師の新たな役割とその可能性AJALT (Association for Japanese-language teaching)』第27号 国際日本語普及協会
- 3 拙稿 (1997) 「外国人への古典指導」『国文学・解釈と鑑賞』794—62 巻7号・至文堂
- 4 小出詞子 (1974) 「日本語教育の専門家」『日本語教育』25号
- 5 大河原 尚 (2004) 「別科日本語研修課程 この一年を振り返って」『別科論集』6号 大東文化大学別科日本語研修課程
- 6 「地域の日本語教室に通っている在住外国人の日本語に対する意識等について」文化庁ホームページインターネット (2006/3/15アクセス)
<http://www.bunka.go.jp/1kokugo/frame.asp?ofl=list&id=1000001687&clc=>

(注)

I 調査の概要

調査目的：国際化の進展等に伴い、我が国に在住する外国人の増加が進む中、地域に在住する外国人の日本語に対する意識等について調査し、今後の日本語教育施策の参考とする。

調査対象：全国12地域の日本語教室に通っている16歳以上の男女(在住外国人)600人

調査時期：平成13年3月2日～3月16日

調査方法：対象者の自記式法(調査対象者が調査票の質問を自分で読み、その回答を自分で記入する方法)

回収結果：有効回収数(率)581人(96.8%)

- 7 国際日本語普及協会 (1988) 『日本語教育機関が考える教師の条件』第11号 国際日本語普及協会
- 8 岡崎眸、岡崎敏雄著 (2001) 「日本語教育における学習の分析とデザイン 言語習得過程の視点から見た日本語教育」凡人社 (日本語教師のための知識本シリーズ:1)
- 9 日本語教授法 河野美抄子 [ほか] (2004) 東京法令出版/凡人社
- 10 「これからの日本語教師(2)-いま日本語教育に何が起きているか-」(2003. AJALT (Association for Japanese-language teaching) 第26号 国際日本語普及協会 国際日本語普及協会